

## 5. 石神井南口ウォーカブルタウン実現にむけたCATの試作

特定非営利活動法人 練馬まちづくりの会  
(東京都練馬区)

### I. 活動の背景と目的

#### (1) 練馬区石神井地区の特徴

石神井地区は、池袋駅より西武池袋線急行で10分の所に位置し、バス路線も集中する周辺地域の公共交通の拠点になっている。この地区は大正時代から開発がはじまり、都立石神井公園を含む周辺地域が風致地区に指定されるなど、良好な住宅地を形成している。

しかし、駅周辺を含めて、全体的に道路基盤が脆弱であり、かつ交通量が多いため、歩行者にとって極めて危険な状態になっている。そのため、長年に渡り、西武池袋線連続立体交差事業や地区内を貫通する都市計画道路の扱いが議論されている。

#### (2) 練馬まちづくりの会の活動

練馬まちづくりの会は、98年2月に林泰義氏（計画技術研究所）を講師に招いて開催したまちづくりセミナーをきっかけに活動を開始した。活動当初は、まちづくり連続セミナーや区内3カ所のタウンウォッチングなど学習を中心とした活動を行ってきた。

当初より、1992年の都市計画法改正により創設された都市計画マスタープラン（都市マス）への対応が会の重要な取り組みの一つになっている。

その後、ここで報告する石神井地区でのプロジェクトがはじまり、様々なまちづくりイベントの開催や区内の市民活動との様々な形での連携を行い、現在に至っている。ちなみに、99年9月にNPO法人の認証を受けた。

#### (3) 石神井地区での取り組み

会は、99年度から石神井地区での活動をはじめた。重要な取り組みの一つである区による都市マス策定に対して、まちづくりNPOとして市民の立場からの取り組みについて議論が繰り返された。そして、生活者の視点から地区の具体的な課題を積み上げていくことによって地域、そして区全体の将来を考えいく方法論を模索していくことを目指すこととなった。そのためのケーススタディ地区として石神井地区を取り上げることになった。

まず99年7月に2日間に渡り、地元商店街の中で倉庫代わりに利用されている店舗において、ガリバーマップづくりのイベントを開催した。そして、ガリバーマップに書き込まれた意見の抽出・整理を行い、地区カルテづくりを行った。10月に開催



非常に危険な駅前商店街

したハロウインパーティにおいて、地区カルテの中間報告を行い、さらに意見収集を行った。それらをさらに分析し、11月に行われた建築士会のまちづくりコンペに対して、C A Tを用いたまちづくり提案を応募するに至った。

## II. 企画の概要

石神井公園駅南口一帯を対象として、「ウォーカブルタウン＝誰もが安心して歩ける街」の実現を目指として活動を行います。

この「ウォーカブルタウン」は、住民の皆さんに広く参加を呼びかけて行った「まちウォッキング」や「ガリバーマップ大会」などの活動成果をもとに提案するもので、具体的には、これを実現するための実践的第一歩として、提案にあるC A T (Community Assist Transporter：お年寄りや障害者の方々などの移動を補助するためのベンチ型循環電動ミニバス)を試作・試乗します。

そして、このC A Tの試作・試乗は、住民方々や他の区民方々に対して広く参加を呼びかける「アウトリーチ活動」として、体験的ワークショップ形式で行う予定です。これにより、提案の主旨である「安心して買い物のできる街路空間の形成」や「緑豊かで閑静な住宅地の環境維持」の必要性を広く住民・区民の方々に訴えかけ、同時にその実現方法についても議論を深め、幅広いコンセンサスを形成したいと考えています。

### (1) C A T (Community Assist Transportation system)

ウォーカブルゾーン内でのお年寄りや障害者の方々などの移動を補助するために、ウォーカブルゾーンの外縁を一周する軽公共交通システムを提案し、これをC A T (Community Assist Transportation system)と名付けます。

C A Tは石神井公園駅や石神井公園駐車場などの数箇所で広域の交通機関に接続し、住民や石神井公園を訪れる人々の利便性を確保します。

C A Tは歩行者の速度で動くベンチです。ゆっくり動く小さな車体は狭い街路でも歩行者を脅かさず、安全で快適なコミュニティ生活を支えます。

C A Tには車椅子も乗れます。

### (2) アウトリーチ

アウトリーチとは、地域の課題に関連した各主体の関心や意向を掘り起こし、それらを相互に調整しつつ「コミュニティづくり」を進めること自体や、そのための技術をさします。

一般にいって、市民活動はともすれば他の住民の方々から遊離したものとなりがちですが、私たちは、再開発に対して具体的に働きかける必要もあり、活動の重点をこのアウトリーチにおいています。また、日本のまちづくりでは、これまで、適切かつ十分にアウトリーチが行われた例は少なく、従って、例えば、地域の利害関係の把握や意向調整など、アウトリーチに必



C A Tの試乗会

要な技術を、日本のまちづくりに適した形で開発する必要もあります。

本活動にはそうした技術の実践的開発という側面もあります。この点において、独創性及び先駆性が高くあると思われます。そして、まちづくりサロンや、試作ワークショップ及び試乗大会は、こうしたアウトリーチを行うための組織・体制づくりと、アウトリーチ活動そのものとして位置づけられるものです。

### III. 活動内容

#### (1) アウトリーチ活動によるC A T提案の周知

このプロジェクトではC A T製作過程全体をアウトリーチ活動と位置づけ、地域にオープンにし、呼びかけていくことによって、多くの人達に参加を呼びかけ、一緒に製作していくこうとした。そのことによって、地域の人達がまちづくりへの関心を高めるきっかけとなることを目指している。

ほぼ月一回のペースで地域で開催されたイベントでは、地域内への告知(町会掲示板・商店街・地域の拠点への告知ポスターの掲示、ミニコミ誌への掲載など)を積極的に行った。各イベントでは、C A T提案の内容(提案に至ったプロセス)の説明や意見収集を積極的に行った。

##### ①キックオフイベントの開催(2000年3月)

このプロジェクトを実行するためには、地域の様々な主体の協力が不可欠であった。これまでのイベントの際も地元商店街などへ呼びかけを行い、関係づくりを行ってきたが、会の活動並びにC A Tプロジェクトの認知度は低かった。そこでプロジェクトスタートにあたり、キックオフイベントを行い、地域へ当プロジェクトのお披露目を行うこととした。

これまで行ってきた会の石神井地区での活動とC A Tを用いたまちづくり提案に至る経緯について説明を行った。

同時に、区内のいくつかの市民グループに呼びかけを行い、市民活動のネットワークの必要性を議論するワークショップの開催とまちづくりを専攻する大学院生による修士研究発表会を同時開催し、まちづくりに関心をもつ多様な人々が参加するイベントとなった。

##### ②地域のイベント(照姫まつり)への参加(2000年4月)

このプロジェクトは、地域の人々にまちづくりへの関心を持つ機会を作ることが大きな目的である。そのために地域で一番大きなお祭りである照姫まつりの際、地元商店街のブースの一部をお借りして、C A T提案のパネル展示と意見収集を行った。

##### ③まちウォッヂの開催(2000年6月)

6月には、多くの人が実際にまちを体感しながら、「歩いてここちよいまち」について考えるためのイベントとして「こだわりまちウォッヂ」を開催した。

このイベントでは、地域への関わりの違いによって、まちの



こだわりまちウォッヂ

見え方が異なることを理解するために、地域に対する立場の異なる人たちに実際にまちを歩くことにした。「地域住民」「地域外の人(公園利用者を想定)」「商店街」「車いす利用者」のグループに分かれて、それぞれの立場からコメントをした。それによって、参加者はお互いにまちに対する多様な価値観の存在を確認することができた。

また、ここでもC A T提案の経緯と趣旨について説明することを行った。同時にこの地域を取り上げた東京大学都市工学科演習授業の成果が学生によって発表された。

なお、このイベントでは、アウトリーチ活動の一環として、事前に周辺の町内会・自治会に対して、個別にイベントの趣旨説明を行い、参加の呼びかけ等を行った。

#### ④夕涼み幻灯会（2000年8月）

毎年、8月に地元商店街主催によって都立石神井公園にあるボート池で灯籠流しが行われる。それに合わせて、「夕涼み幻灯会(野外スライド上映会)」を開催した。地元ミニコミ誌や郷土資料館などの協力によって収集した昔の石神井の写真やみずとみどり研究会の協力による「石神井から東京の縁」をテーマとした上映会を開催した。この場でも、C A T提案の説明や意見収集も行った。

#### (2) 地域のネットワークを最大限に活かしたC A T製作過程

#### ⑤C A Tの製作（2000年8月～9月）

C A T製作には、地元商店街の橋渡しで地元の育英工業高等専門学校の協力を得られることとなった。学校内の工房にて、同校の依田勝教授を中心として、同校の夏期休暇期間中に製作が開始された。

#### ⑥C A T製作ワークショップ（2000年9月）

C A Tの躯体と駆動部について、育英高専の依田教授の全面協力によって完成し、仕上げの化粧部分の製作は地域の多くの人に呼びかけ、ワークショップとして開催した。地元絵画教室や児童館の協力によってパネル部分などのデザインと塗装を行った。

会場は年に数度しか開放されない地元の神社境内を商店街の協力で利用した。また、フリーマーケットを同時開催した。

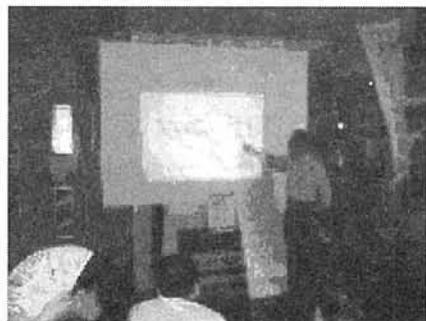
#### ⑦C A T走行イベント&石神井まちづくりシンポジウム

##### （2000年10月）

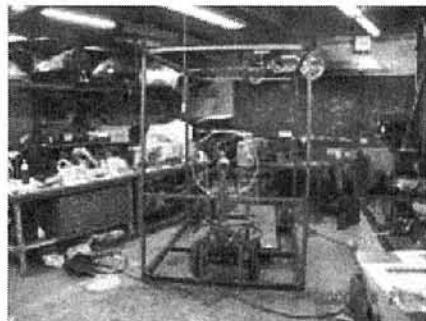
このプロジェクトは一貫して、地元商店街の協力を得てきた。これは地元商店街50周年イベントの一つの目玉としてC A Tを位置づけるという意向もあった。そこで、10月に1週間にかけて行われた50周年イベントに、C A Tのお披露目(走行イベント)を合わせた。

また、このイベントをC A Tプロジェクトの集大成との位置づけ、石神井まちづくりシンポジウムを開催した。

C A T自体は法規上の問題から、公道を自力走行させること



夕涼み幻灯会



C A T製作風景（育英高専にて）

はできないため、商店街内（公道）では人が牽引し、走行は地元銀行駐車場において行った。走行会は商店街のイベント（サンマ焼大会や大抽選会）の会場に隣接して行ったために、多くの地域の人達に周知することができた。また、同時にまちづくり・すまいづくりに関するアンケートを行った。

この時期は、区の呼びかけによって、当該地区を対象として、「石神井公園駅周辺地区まちづくり協議会」が発足したことや都市計画マスタープラン全体構想のまとめと時期が重なった。そこで、まちづくりシンポジウムでは、まちづくりの会の石神井地区での活動だけでなく、都市計画マスタープランの策定状況などの報告もを行い、意見交換を行った。

さらに、イベント期間中は、地元小学生の絵を商店街の街路灯に展示する「パークロードギャラリー」を開催し、多くの人達への関心を高める仕掛けを試みた。

#### IV. 活動の効果

##### (1) まちづくりの選択肢の提案

###### ①石神井地区の抱える課題に対して

地区の最大の課題は交通問題であることは多くの地域関係者の共通認識である。その課題に対して、これまで、鉄道高架と都市計画道路の事業化が唯一の解決策と思われていた。しかし、この都市計画道路の取り扱いが地域を二分し、実際に地域の課題が解決に至らなかった。都市計画道路に対して賛成・反対といった二元論ではなく、新たな創造的な解決策を探るという視点が今後は必要になると考えられる。

そのために、今回行った都市計画道路の建設を前提としないC A Tを用いたウォーカブルタウン提案という選択肢の追加はまちづくりを考える上で大きな意味を持つ。この提案自体の具体化のためには精査が必要である。そのことも含めて課題を解決するための選択肢を提案した意義は大きい。

###### ②都市交通のあり方に対して

C A Tは、石神井の現状と課題を整理・分析する中で出された提案である。しかし、C A Tは、他都市の交通問題の解決を可能にする可能性を秘めている。実際にC A Tがメディア等で紹介されることによって、他都市の交通問題を考えるN P O等からの問い合わせを受けるようになった。

##### (2) 新たな地域のネットワークの構築

###### ①既存の地域組織との関係

このプロジェクトは、さまざまな組織の協力によって成立した。地元商店街の石神井公園商店街振興組合からは一貫して、支援を受けた。商店街主催のイベントへの参加や場所の提供といった“場”的支援や地元の育英工業高等専門学校への橋渡しなど“地域情報”的提供は、歴史の浅いまちづくりの会にとっては貴重な支援であった。また、商店街だけでなく、地元町内



商店街の中でCATを牽引

会との関係も少しづつ構築され、一連のイベント以降、地域のさまざまなイベント（小学校におけるこども向けのまつりや消防訓練）へのC A Tの出展も行われた。これらイベントへの参加によって、地域に対して、C A Tを通じてウォーカブルタウン提案について説明を行うなど、もう一つのテーマであるアウトリーチ活動を充実させることができた。

## ②多様な主体の関わりとまちづくりへの関与

C A T製作過程の中でも地域のさまざまな主体の協力を得ることができた。育英工業高等専門学校による技術面（材料でも？）の支援なしにはこのプロジェクトは成立しなかった。また、仕上げ段階では、地元の絵画教室や区立石神井児童館の先生やこどもたちの協力があり、将来の夢としてC A Tを表現することができた。C A Tの存在自体が石神井地域の地域力の結晶である。このプロセスを通じて、地域のネットワークが重要であることを再認識することができた。

また、地域のさまざまな主体が、互いに得意な能力を発揮することによって、まちづくりに協力（地域貢献）をすることができることをお互いに認識することもできた。

## （3）まちづくりを担う新たな個人の発掘と既存地域組織の活性化

### ①まちづくりを担う新しい人材の発掘

当初、このプロジェクトに石神井地区のメンバーの参加はあったが、割合は多くなかった。しかし、地区で連続的にイベントを開催することによって、参加者の中から、会の活動に参加する人が増えてきた。彼らはプロジェクトの後半では中心的な役割を担うようになった。

また、9月から区の呼びかけによって発足した「石神井公園駅周辺まちづくり協議会」では、彼らの数人が公募委員となり、中心的な役割を担うようになった。彼らはこれまで既存の地域組織に属してはおらず、これまで地域活動を中心的に担ってきた既存の地域組織以外の新たなまちづくりの担い手を発掘したことになる。

### ②既存の地域組織の再活性化？

この地区では長年に渡り、町内会・商店街といった既存の地域組織が地域活動の中心を担ってきた。そして、彼らを中心として、これまでに何度もまちづくりへの取り組み（鉄道高架推進、都市計画道路問題、商店街共同化など）をしてきた。ところが、それらが頓挫することが多く、まちづくりに対する無力感が存在していたと思われる。

そのような中で、地区との利害関係の少ないまちづくりの会が積極的につかわかりやすい活動をしてきたことやコミュニケーションの場を作ることによって、既存の地域組織の再評価にもつながり、再び既存の地域組織がまちづくりへの取り組み



子ども達によるCATのデザイン

をする動きも見えてきた。

### ③石神井公園駅周辺地区まちづくり協議会の発足と関与

9月に、区の呼びかけによって「石神井公園駅周辺地区まちづくり協議会」が発足した。対象エリアはC A T提案が対象としてエリアを少し拡大した範囲であった。

これまで練馬区では、住民参加を積極的取り入れた協議会によるまちづくりを行ってこなかった。しかし、この協議会では、従来と比較して公募委員を含む、透明度の高い協議会を設置することとなった。この協議会には、幅広い世代や立場の人達が公募委員として参加し、積極的な活動を展開している。また、まちづくりの会は地域からの要請により、協議会運営をファシリテーターとしてサポートすることとなった。

## (4) まちづくりの会の活動への効果

地区内でのC A Tプロジェクトの効果については、述べたが、中心的にプロジェクトを担ってきたまちづくりの会の活動への影響を整理してみる。

### ①区内での認知度を高めることができた

後半になるとメディアに取り上げられることが多くなり、活動を周知する効果があった。そのためにC A Tの取材やイベントへの出張依頼が相次いだ。これは会の活動自体への認知だけでなく、C A Tを用いたウォーカブルタウンの提案を周知する貴重な機会になった。

また、これをきっかけに区内のさまざまな活動と交流をする機会が多くなった。まだ具体的な成果としては現れていないが、これらのネットワークによって新たな活動の展開があると思われる。

会にとって、会員が増加した以上に、さまざまな背景をもつた人達の参加が会員構成という点からは意義があった。

### ②多種多様なテーマを扱うグループとの交流

また、C A T自身が交通、環境、福祉、商業などさまざまなテーマ性を兼ね備えていることにより、これまで交流のなかつた多種多様な領域の専門家やグループからの問い合わせを受け、交流を行うようになった。このような異なる専門性をもつたグループのネットワークは、今後の会の活動にとって貴重な財産を形成したことになる。

## V. 今後の課題

C A T提案と一連のイベントによって新たな可能性が出てきた。その上で今後、継続的に活動をしていく上で以下のような課題が考えられる。

### (1) C A T提案の現実化への検討

C A T製作過程を通じた連続イベントの開催によって、C A T提案の前提となった地区の課題について、少しづつ共通認識



石神井まちづくりシンポジウム

となりつつある。そして、解決方法にも複数の選択可能性があることを示した意味は大きい。今後、さらに議論を進めていくためには、次の2点についてさらに検討する必要があると思われる。

#### ① C A T 自体の実現可能性の検討

現段階ではC A Tは公道上を走行することができない。まずは、車体性能、法規上の課題をクリアし、公道上での走行を可能にすることが重要である。それによって交通社会実験などさらなるまちづくりを議論するためのツールとしての活用の可能性が拡大するとともに、実現の方向へ大きく発展すると思われる。

#### ② ウォーカブルタウンの実現可能性の検討

C A Tを用いた交通システムが成立するためには、C A T自身の性能的、制度的課題だけでなく、C A Tが成立する社会的条件（採算性や交通量など）の整理が必要である。石神井地区においてC A Tが成立するための条件、また石神井以外の場所でのC A Tの成立条件などについての検討が必要であると思われる。

### (2) 石神井地域でのまちづくりの会の役割

当初、地区と関わりの薄いまちづくりN P Oの実験プロジェクトであった（地区内のメンバーもいるが）。しかし、地域でイベントを繰り返すことによって、新たな地域のネットワークを構築することとなった。また、行政とは違うスタンスでまちづくりの方向性を提案したことは大きな意味を持っている。このように、まちづくりN P Oが地区レベルのまちづくりに果たす役割として地域のコーディネーター、地域に根ざした専門性をもったグループとしての役割が考えられる。その後、地域からの要望により、会はまちづくり協議会運営をサポートすることとなる。これは会が地域との信頼関係を構築し、自らの持つ専門性を地域が評価したと考えられる。

さらに、今回の事例によって、まちづくりN P Oは、既存の地域組織に属していないまちづくりに積極的に関わる新たな担い手を発掘し、その受け皿となっていることも明らかになった。

会の役割は、地域との関係が薄い活動が、その後地域に根ざした専門性を持った集団、新たなまちづくりの担い手の受け皿、地域の活動を支えるサポーター（応援団）など、地区の状況に合わせて柔軟に変化し、多面性を持つことが明らかになった。このような柔軟な対応が新たなまちづくりの担い手としてのまちづくりN P Oに求められているのではないかと思われる。